

1 ジェイソン

ジェイソンは思った。歳をとると、こうなるのか。

関節は痛いし、脚は震える。山をのぼれば息が切れる。

顔はどうか知らないが、手はやせて節くれだち、甲に静脈が浮いている。

体臭まで老人っぽい——ナフタリンとチキンスープを合わせたようなにおいだ。それにしても、十六歳から七十五歳になるには数秒かかったが、老人臭はすぐに来た。へんしーん、くさっ！

「あともう少しよ」パイパーがジェイソンにほほ笑んだ。「ジェイソンの変装、大成功ね」

いうのは簡単だ。パイパーとアナベスはかわいい古代ギリシャの侍女に変装している。白い袖なしのガウンと編みあげのサンダルなら、岩がちの道を歩くのは問題ない。

パイパーは、こげ茶色のロングヘアをギリシャ風に編んでアップにし、銀の腕輪をいくつもつけている。母親のアフロディテ像そっくりだ。ちよつと怖い。

ガールフレンドが美人だというだけでもドキドキなのに、愛の女神の娘だなんて……緊張しっぱなしだ。少しでもださいことをしたらアフロディテがオリンポス山から飛んできて、ブタに変身させられそうだ。

ジェイソンは頂上を見た。まだあと百メートルはある。

「最悪」ジェイソンはヒマラヤスギにもたれ、額の汗をぬぐった。「ヘイゼルの魔法は効きすぎだ。

戦いになつたら手も足も出ない」

「戦うつもりはないから大丈夫」アナベスも侍女の変装に不満げだ。ガウンは肩からずり落ちてばかりだし、アップにしたプロンドが乱れ、うしろから見ると脚を広げたクモのようだ。けれど、クモ嫌いのアナベスにはいわないほうがいい。

「宮殿に侵入し、必要な情報を手に入れたら、すぐ引き返す」アナベスがいった。

パイパーがアンフォラ（訳注…ブドウ酒などを入れておく大型の両取っ手つきの壺）を地面におろした。中に剣を隠してある。「少し休憩しよう。ジェイソンも息を整えて」

パイパーは魔法の豊穡の角を腰にさげ、短剣カトプリスはガウンのひだに隠してある。一見すると普通の侍女だが、いざとなれば二刀流で戦えるし、敵の顔面にマンガーをお見舞いすることもできる。

アナベスも肩からアンフォラをおろした。こちらにも中に剣を隠してある。しかし、武器がなくても簡単に近づかないほうがいい。灰色の目は警戒をおこたらない。うっかりお茶に誘ったら、股間を蹴りあげられるかもしれない。

ジェイソンは深呼吸した。

眼下に見えるアフアレス湾は人工着色料で色づけしたように青い。アルゴⅡ号は沿岸から数百メートルのところ停泊している。白い帆は切手、九十本の自動オールは爪楊枝ほどの大きさだ。仲間は甲板に出て、リオの小型望遠鏡で順番にこちらを見守りながら、ジェイソンの老人姿に笑いをこらえているにちがいない。

「なんでイタキ島に」ジェイソンはぼやいた。

島自体は美しい。島の中央は緑の山が連なり、周囲は白い岩の崖だ。数カ所ある入江や港には、赤い屋根の家や白い漆喰塗りの教会が並んでいる。

山の斜面にはポピーやクロッカスが花を咲かせ、野生のサクランボがなっている。風がギンバイカの花の香りを運ぶ。景色は最高——だが、気温は四十度。古代ローマの浴場のように蒸し暑い。

ジェイソンがその気になれば、頂上まで飛んでいくなんて簡単だ。しかし、今回は相手に怪しまれないよう、膝が悪く、チキンスूपくさい老人のふりをしつづけてはならない。

二週間前、クロアチアでヘイゼルと一緒に崖をのぼり、盗賊スキロンと対決したときのことを思い出した。少なくともあのときは十六歳の少年として戦えた。これから会う相手は盗賊よりたちが悪い。

「本当にこの山で合っている？」ジェイソンはいった。「なんだか——わからないけど——静かすぎる」

パイパーは尾根を見渡した。髪に水色のハルピユイアの羽根を一本さしている——昨晚の戦利品だ。侍女の変装からは想像できないが、昨晚ひとりで見張り中にはあさん鳥集団を撃退して手に入れた。本人は「たいしたことないわよ」といつているが、内心は誇らしいのだろう。この羽根は、去年の冬にハーフ訓練所に来たときからこんなに成長したのよ、という証だ。

「遺跡はこの頂上にある。カトプトリスで見たの。それにヘイゼルがいつてたでしょ。『見たことがないくらい大勢の』……」

「『怨霊が集まっていたわ』だろ」ジェイソンがつづけた。「ありがたいね」

霊と戦うなんて、このあいだのハデスの館でもうこりごりだ。しかし、冒険の旅の成功がかかっ

ている。アルゴII号の乗組員は大きな決断をしなくてはならない。選択をまちがえば冒険の旅は失敗に終わり、全世界が滅びる。

パイパーの短剣、ヘイゼルの直感、アナベスの本能、そのすべてが一致した。答えはこのイタキ島にある。オデュッセウスの宮殿に怨霊が集まり、ガイアの命令を待っている。今回のミッシヨンはそこにもぐりこみ、現状を把握し、今後の対策を練ること。そして、できれば生きて島を離れることだ。

アナベスが金のベルトをしめ直した。「変装がばれなければいいけど。あの求婚者たちは生きてるときだつて横暴だったのよ。あたしたちがハーフだつてばれたら——」

「ヘイゼルの魔法を信じましょ」とパイパー。

ジェイソンも同感だ。

かつてこの島には史上もつとも強欲で、よこしまな求婚者たちが約百人いた。イタキ島の王オデュッセウスがトロイア戦争後、消息不明になると、島中の貴族がオデュッセウスの宮殿に押し入り、居座つたのだ。だれもが女王ペネロペと結婚し、イタキ島の王になろうともくろんでいた。しかし、まもなくオデュッセウスが無事に帰還し、全員を倒した。絵に描いたようなハッピーエンドだ。しかし、カトプトリスがパイパーに見せた映像のとおりだとしたら、求婚者集団がよみがえり、自分たちが殺された現場に戻ってきたらしい。

英雄オデュッセウス——史上もつとも有名な英雄——の宮殿を訪れることになるなんて、ジェイソンは思つてもいなかった。とはいえ、今回の冒険の旅は驚くことの連続。アナベスは、タルタロスの深淵から生還したばかりだ。それとくらべたら、老人にされたくらいで文句はいえない。

「ふう……」ジェイソンは杖つえで体を支えた。「外見も中身うちみと一緒いっしょなら、ぼくの変装かんぺきは完璧かんぺきなんだろう。そろそろ行こうか」

坂道をのぼるうちに、汗あせが首をつたい、ふくらはぎが痛くなってきた。暑いのに寒気がする。思おもい出さないようにしていても、最近見た夢が気になってしかたない。

ハデスの館以来、夢がますますリアルになってきた。

夢の中で、ジェイソンはエピロスの地下にあるハデスの館にいる。巨人族きょじんぞくギガンテスのクリュティオスがジェイソンを見おろし、その声こゑが何重にも反響はんきやうする。「おれひとりただひとりを倒すのでさえ、おまえたちハーフ全員の力が必要だった。いざ大地の女神が目を開けたら、今回のようにはいかない」

また、ハーフの丘おかにいることもあった。目の前にガイアが姿を現す。その形を作っているのは渦うず巻く土と落葉と小石だ。

〈かわいそうに〉ガイアの声こゑが丘おか一帯に反響はんきやうし、ジェイソンの足元の地面かみが震える。「おまえの父親は神々の王だが、おまえはつねに二番手……ローマの仲間にとつても、ギリシャの仲間にとつても、そして、家族にとつてさえな。どうやって自分の価値を証明するつもりだ？」

いちばんの悪夢の舞台ぶたいは、ソノマにある狼城おおかみしろの中庭だ。目の前にいるのは女神ユノ。溶とかした銀のようにオレンジ色に光っている。

〈あなたは私のものです〉声こゑが轟とどろく。「あなたの父親は私の怒いかりをしずめるために、私にあなたの命を差し出しました」

見てはいけないとわかっているのに、目をつぶることができない。ユノが超新星ちやうしんせいのように光り、

神としての真の姿になる。ジェイソンの体に激痛が走る。全身が燃え、丸焼きにしたタマネギのように外側からはがれていく。

と思つたら、場面が変わつた。場所は狼城のままで、ジェイソンは子ども——二歳の頃に戻り、目の前で女性が膝をついている。なつかしいレモンの香り。姿はぼやけ、よく見えないが、声には聞き覚えがある。流れの速い小川に張つた薄氷のように、もろく、はかない。

〈かならず戻つてくるから。またすぐ会えるから〉

夢から目覚めるたび、ジェイソンは冷や汗をかき、目がうるんでいる。

ハデスの館に行つたとき、ニコ・デイ・アンジェロがいつていた。〈ここは巡礼者が先祖と話をするためにやって来る場所だ。地下に入つたら、目をそむけたくなるようなものを目にしたり、迷わせようとする声を耳にしたりするかもしれない〉

ジェイソンは母親の幽霊が出てこないことを願つた。しかし、夢は日増しにリアルになつてくる。そして今、ジェイソンは怨霊の集まる宮殿の遺跡にむかっている。

母親の幽霊が現れるはずがない。ジェイソンは自分にいい聞かせた。

しかし、手の震えは止まらない。一步ごとに足が重くなる。

「あともう少しだから」アナベスがいつた。「がんばって——」

山が轟いた。頂上のほうで大勢がいつせいに声をあげた。コロセウムの歓声のようだ。ジェイソンは鳥肌が立った。つい最近、ローマのコロセウムで、興奮しきつた幽霊の観客の前で命がけの戦いをしたばかりだ。あんなことはもうごめんだ。

「今の、何？」ジェイソンはいつた。

「わからない」パイパーがいった。「でも、何か楽しんでるみたい。さあ、一度死んだ人たちとお友だちになりにいきましょう」